

日口浮魚・底魚類 (総説)

最近の動き

日口間には、北西太平洋の生物資源の保存及び最適利用を考慮し、相互の 200 海里水域で他方の国の漁船が漁業を行うために、1984 年に「日本国政府とソヴィエト社会主義共和国連邦政府との間の両国の地先沖合における漁業の分野の相互の関係に関する協定 (通称：日ソ地先沖合漁業協定)」が締結され、これに基づき日口漁業委員会が設置されている。日口漁業委員会では、日口両国水域に共通に存在する主要な魚種群の持続的利用を協議するため、科学者グループを設置し、それらの資源状態を協議し報告書を作成している。

日口漁業委員会第 31 回会議の決定に従い、両国科学者は以下の諸活動を行い、日口両国が双方の水域内で利用している同一資源について最新の情報を交換し、資源状態に関する見解をとりまとめた。2015 年 10 月に横浜市において「さんま、まさば、まいわし、かたくちいわし、いか及びすけとうだらの生態学及び現存量に関する意見交換会」を開催し、サンマ、スケトウダラ、マイワシ、マサバを対象として報告、議論を行った。2015 年 11 月にウラジオストックにおいて「第 29 回日口漁業専門家・科学者会議」を開催し、資源状況などに関する資料及び意見の交換を行い、資源に関する見解と 2016 年の調査協力計画案を作成した。2015 年 12 月にモスクワで開催された「日口漁業委員会第 32 回会議」において当該調査協力計画案を検討し採択した。

ロシアと我が国漁業の歴史

我が国の北洋漁業、特にロシア沖における漁業として、日露戦争の結果による領土の拡大に伴う漁場の広がりもあり、大正時代には母船式カニ漁業、帆船タラ漁業等が興った (斉藤 1960)。昭和初期には、母船式さけ・ます漁業、トロール漁業を含め発展したが、第 2 次世界大戦によってこれら漁業は大きな影響を受けた。第 2 次世界大戦後、マッカーサーラインによって我が国漁船の漁場は著しく狭められていたが、1952 年に同ラインが撤廃されるとともに、ソ連沖公海新漁場の開発が積極的に進められた (北野 1980)。1953 年に北方四島周辺太平洋岸漁場、1956 年にサハリン東岸タライカ湾、1957 年にサハリン西岸タートル海峡で調査が行われ、スケトウダラ、ホッケ、カレイ類等の底びき網漁場が開発された (北野 1980)。1956 年には日ソ漁業条約、1969 年には日ソかに取決、1972 年には日ソつぶ取決が結ばれた。我が国漁船のソ連沖での漁獲量としては、1975 年には北海道沖合底びき網が 38.9 万トン、北転船がカムチャッカ半島周辺で 73.3 万トン等であった (北野 1980)。

一方、ソ連による日本沖での漁獲量は、1975 年にはサバ 13.3 万トン、マイワシ 12.2 万トン、スケトウダラ 13.4 万トン、イトヒキダラ 10.6 万トン等、合計 52.7 万トンであった (北野 1980)。1976 年 12 月にソ連は漁業管理法を制定

し、200 海里漁業水域を設定したが、我が国も 1977 年 3 月に同漁業水域を設定した。1977 年には日ソ・ソ日漁業暫定協定、1978 年には日ソ漁業協力協定が結ばれ、相互に相手国 200 海里水域で自国の漁船が操業できるようになった。1978 年にソ連漁業水域内で我が国に与えられた漁獲割当量 (漁獲枠) は、スケトウダラ 34.5 万トン、イカ 14.6 万トン、イカナゴ 6.5 万トン、マダラ 4.5 万トン、サンマ 6.9 万トン等、合計 85 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量に比べかなり減少した (北野 1980)。同年の日本漁業水域内におけるソ連漁業への漁獲割当量は、マイワシ・マサバ 31.8 万トン、スケトウダラ 8.0 万トン、イトヒキダラ 13.8 万トン等、合計 65.0 万トンであり、200 海里水域設定以前の漁獲量とそれほど差はなかった (北野 1980)。

相互の相手国 200 海里水域内での割当量の推移として、ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化を図 1 に示した。1979～1985 年には、割当量は 60 万～75 万トンの範囲であったが、1986 年には 15 万トンへと大きく減少した。1987 年にはそれまでの無償枠 (相互枠) の他に、日本漁船に対してソ連水域で 10 万トンの有償枠が設けられた。我が国漁業に対する割当量は、1988 年には相互枠と有償枠を含めてスケトウダラ 12.8 万トン、サンマ 6.5 万トン、イカ 7.5 万トン等、合計 31 万トンであったが、その後減少を続け、2001 年にはスケトウダラ 0.5 万トン、サンマ 3.6 万トン、イカ 0.9 万トン等、合計 6.0 万トンとなり、1978 年の 7% にまで落ち込んだ。2005 年以降、割当量は 5.6 万～5.8 万トンで推移していたが、2013、2014、2015 年は、それぞれ 6.7 万トン、7.6 万トン、6.4 万トンであった。2016 年の漁獲割り当て量は 6.5 万トン (相互入漁 6.3 万トン、有償入漁 0.1 万トン) で、漁業種類別の割り当て量の順位は、さんま棒受網、いか釣り、底はえ縄、沖合底びき網となっている。

日本水域におけるロシア漁船に対する割当量は、1985 年以降我が国漁船に対するロシアからの相互枠と等量で推移しており、1988 年には 21 万トンであったものが、1994 年には 10 万トンにまで減少した。1998 年以降割当量はさらに減少し、2001 年には 5.2 万トンとなり、それ以降 5.0 万～5.5 万トンで推移していた。2013、2014 年と増加し、それぞれ 6.2 万トン、7.1 万トンとなったが 2015 年は、6.2 万トンと減少した。2016 年は 6.3 万トンと 2015 年より若干増加した。

魚種の内訳は、1980、1990 年代はマイワシ・マサバが最も多かったが、2001～2012 年にはイトヒキダラがほぼ半分を占めていた。2016 年の割当量はサンマ 0.9 万トン (前年比 41%)、イトヒキダラ 2.8 万トン (前年同)、マイワシ・マサバ 2.7 万トン (前年比 200%) となった。

ロシア水域における我が国の漁獲量の推移を図 2 に示した。相互枠と有償枠を合わせて、我が国漁船の漁獲量は

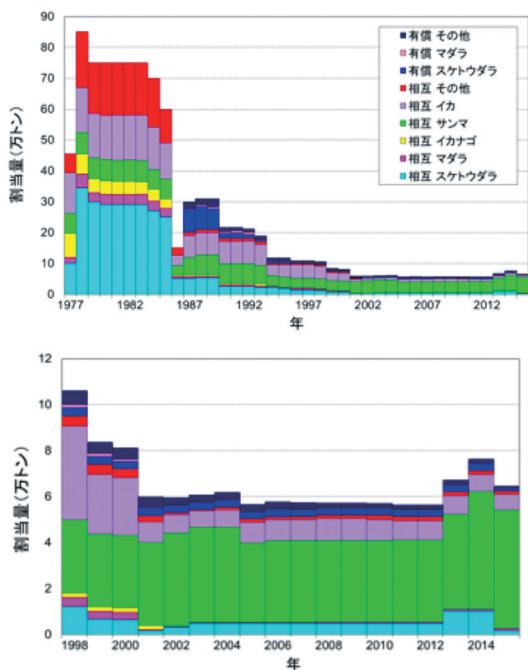


図 1. ロシア水域における我が国漁船に対する漁獲割当量の経年変化 (下は近年の拡大)

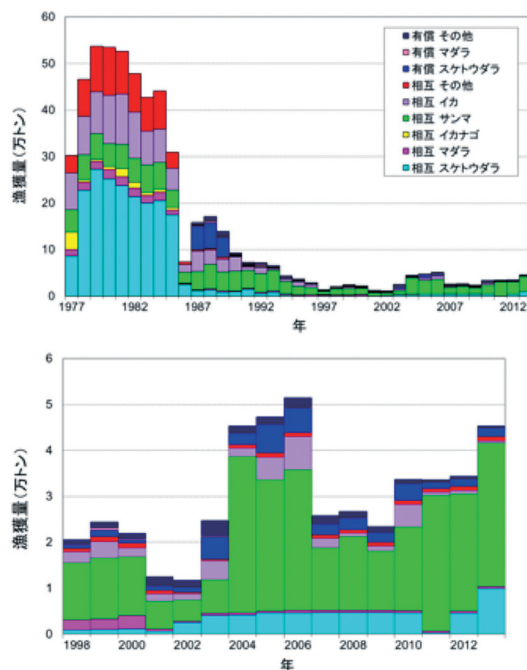


図 2. ロシア水域における我が国漁船の漁獲量の経年変化 (下は近年の拡大)

1979年の約54万トンが最も多く、スケトウダラが約5割を占めた。漁獲量は、1986年には約7万トンに急減したが、1988年には約17万トンに回復した。その後は直線的に減少し、2002年には1.2万トンとなったが、2004～2006年には4.5万～5.1万トンに増加した。2007～2009年には2.3万～2.7万トンに半減したが、その後は3万トン以上に回復している。1980年代前半はスケトウダラ、その後はサンマが最も多く漁獲された。割当量合計に対する漁獲量合計の割合は、1980年代は45～71%であったが、1990年代には13～43%に低下した。2004～2006年には再び73～89%に上昇したが、2007～2009年は40%台に低下した。2013年には60%台後半に増加したが2014年は51%に減少している。

我が国水域におけるロシア漁船の漁獲量は、1985～1992年には5万～15万トンで、マイワシとマサバが大部分を占めたが、1994年以降ほとんど漁獲されなくなった。1999年以降はイトヒキダラのみが漁獲されていたが、2010、2011年にはサンマの漁獲もみられた。2000年以降のロシア漁船による漁獲量は、2.4万～2.7万トンで推移していたが、2008年以降2万トンを下まわっている。2011年は震災によるロシア側の操業自粛により、漁獲量は1.2万トンと前年の3分の2に減少したが、2012年には1.7万トンと震災前の水準に戻り2014年は2.3万トンに増加した。

なお、日本漁船は、日ソ地先沖合漁業協定の他に日ソ漁業協力協定、北方四島周辺水域操業枠組協定及び貝殻島昆布協定(民間)に基づく操業も行っている。

日ロ両国水域にまたがって存在する資源に関する資源評価

2015年の日ロ漁業専門家・科学者会議において、日ロ両国が双方の水域内で利用している同一資源の状況に関して、両国の科学者は、以下の通り共通の見解を持った。スケトウダラ、サンマ、スルメイカ等については、ロシア水域での分布や資源状態に関する情報が、それらの適切な資源評価及び評価結果を踏まえた資源管理のために重要であり、引き続き日ロ科学者による意見交換会等の機会に、これらの情報収集に一層努める必要がある。

- (1) サンマ：現在サンマ資源は平均値付近にあり、資源減少の傾向が見られること及び経年変動が大きく、操業の影響も増大しており、今後の状況の推移を注視しなければならない。
- (2) マイワシ：太平洋のマイワシ資源は1980年代と比べれば、資源は低位にあるものの、近年、明瞭な増加傾向が見られる。対馬暖流系群マイワシ資源明瞭な増加が見られるものの、1980年代と比べて依然として水準は低いままであり、今後の状況を見守り、日本海や東シナ海における幼魚の漁獲を制限し、管理していくことが必要である。
- (3) マサバ：資源は2000年代前半の最低水準から脱し、増加が認められている。
- (4) カタクチイワシ：カタクチイワシの資源は十分に漁業が可能な中位にある。
- (5) スルメイカ：日本海においてスルメイカの分布の北への移動が見られているものの、太平洋及び日本海におけるスルメイカの資源は、過去10年間、比較的高位に維持されている。
- (6) ニシン：サハリン・北海道系ニシンの資源は、極めて低

位にあり、増加の兆しもない。

(7) スケトウダラ：1990 年以降、スケトウダラ北部日本海系群の資源は低位にある。

ロシアからの割り当てに関する その他の重要資源に関する情報

マダラ、キチジ等の重要資源に関して、ロシアから入手可能な情報は少ない。ロシアは、これら魚種についても資源調査を基に TAC を設定しており、当該 TAC は基本的に資源動向を反映していると考えられる。ここでは、我が国漁船が操業している水域の主な魚種に関して、ロシアが設定した極東水域の TAC 数量を記載する (表 1)。

表 1. ロシアによる極東水域の TAC 数量 (トン) の推移

魚種名	2013年	2014年	2015年
スケトウダラ	617,900	618,600	639,900
マダラ	46,200	57,300	46,700
コマイ	7,700	2,700	2,700
ホッケ類	47,200	54,200	49,200
メヌケ類	4,738	4,788	4,692
キチジ	515	333	333
カレイ類	8,835	6,000	6,970
タコ類	240	240	240
ニシン	8,600	6,000	6,000

執筆者

北西太平洋ユニット
北西漁業資源サブユニット
北海道区水産研究所 資源管理部
伊藤 正木

参考文献

北野 裕. 1980. 北海道海域底魚資源. *In* 青山恒雄 (編), 底魚資源. 恒星社厚生閣, 東京. 204-228 pp.
齊藤市郎. 1960. 遠洋漁業. 恒星社厚生閣, 東京. 318 pp.